

# アカデミーから

## 木育の多様性を広めよう

岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 ● 前野 健

3月は卒業式シーズン。森林文化アカデミーからも約40名の学生が旅立ちます。卒業生達はこれから様々な現場で活躍していくわけですが、同時に森や木のことを伝えていく木育のプレイヤーとしての活躍も私は期待しています。

私が担当する木育の実習では、近年、専攻をまたいだメンバーで行うプロジェクトが増えています。例えば『里山で行う親子の工作プログラム』では、1つのプログラムの中で、林業専攻の学生が森の中で行うフィールドワークを担当し、木工専攻の学生が、もの作りのレクチャーを担当します。こうすることで、もの作りを学んだ学生だけで行うプログラムよりも、参加者は、より深く森について知ることができず。相乗効果として、作った作品への愛着が増すなど、プログラムの質を向上させることができるのです。

このような専攻の異なる学生の連携は、当初はプログラムの質を上げることが目的として始めました。しかし、実習を回し始めると、お互い理解しているようで実は知らなかった、専攻による考え方や、ものの方のの違いを知る相互理解の場となったのです。木を切る側（林業）と木を使う側（木工）は近いよ

うで、それぞれの考えは異なります。また、プログラムを回してみると、森や木についての深い愛着を持つ自分達と参加者との意識の差に驚くこともありました。とかく、専門の学びを深めていくと、森や木に対して「正しいことをしなければいけない」というふうになり、まじめな学生ほど考えてしまうようです。しかし、社会に出れば、立場によって「正しい答え」は1つでは無いことに気がきます。共創や共生がテーマとなる、これからの社会において、他者を理解できる広い視野を持つことは、様々な場面で役立つこ



里山のフィールドワークを行う林業専攻の学生



アクティブGで野鳥のワークショップを行うアカデミーの卒業生

とだと思えます。少し話がずれてきてしまったので、木育の話に戻ってみましょう。アカデミーの卒業生達は2年間の学びを終えて、それぞれに理想の森や理想の木の活用方法を思い描き、巣立っていきます。2月に行われた、クリエーター科の学生による課題研究発表会では、林業、森林環境教育、木造建築、木工の4つの専攻の学生達が、多様性に富んだ研究と実践について発表をしてくれました（研究の要旨については、森林文化

アカデミーのHPから読むことができます）。その内容の1つ1つが、森や社会を良くしていくという視点に立った、木育のプログラムとも言えます。これはまだ、芽を出したばかりの「小さな種」ですが、そのどれもが魅力的な将来性があり、これからのように花を咲かせるのが楽しみです。

この多様な種のその後を知ってもらいたいと考え、一昨年より、「森林文化マルシェ※」というイベントを始めました。これはアカデミーの卒業生が集まり、森や木をテーマにした展示、物販、ワークショップなど行うイベントです。4つの専攻のアカデミー卒業生が集まることで、多様な森や木の魅力を体験でき、去年は2回目が開催されました。

昨年末には同様の趣旨で、岐阜県木青（岐阜県木材青壮年団体連合会）とも連携して、JR岐阜駅のアクティブGで「森のクリスマスマーケット」というイベントを行いました。ここでは卒業生による、木のカトラリー販売や森の素材を使った雑貨店。野鳥について楽しく学ぶライブペイントやワークショップが行われ、森や木の魅力を多くの方に体験してもらいました。

森林文化アカデミーの卒業生は、森や木のプロフェッショナルであると同時に、多様性に富んだ木育のプレイヤーでもあります。私は今後も積極的に機会を作り、魅力的な木育プログラムを実践する卒業生達の活動を広めたいと思っています。

※森林文化マルシェは昨年「森の散歩道」と名前を変えて、美濃市で開催される、ミノマチャマーケットの中で実施されています。